

「明日香調べ」

図書総務課 小嶋 久枝

奈良県にある「明日香村」をご存知ですか？

その昔、聖徳太子や大化の改新の舞台となった都があったところです。最近では、「キトラ古墳」の天文図・四神の発見が有名です。考古学ファンやハイカーがリュックサックを背負って、レンタサイクルで古墳や石造物を見てまわるとのどかな村です。皆さんも学校の遠足や社会見学で1度は訪れたことがあるのではないのでしょうか。私はこの土地に嫁ぎ、歴史の中にどっぷりと漬かって暮らしています。

住まいを聞かれて「明日香村です。」と答えるとほとんどの方が「いい所にお住まいですね。」と言われます。明日香村に住みだした頃は、毎日の忙しさに土地柄を考えるゆとりもありませんでしたが、住んでいく中で様々な行事や四季折々のイベントに携わっていくうちに、自然と明日香の歴史を肌で感じるようになってきました。そんなある時、「明日香と飛鳥どちらが正しいの？」と聞かれ、はたと気づいたのです。自分の住んでいる土地柄について語れるものを持っていないということに。明日香村に住むということは、歴史的な風土・景観を守るだけでなく、歴史的伝承を次世代に伝えていかねばならないという使命を帯びているということなのです。それから私の独学での「明日香調べ」が始まりました。（明日香小学校では新教育課程で始まった「総合学習」の時間に明日香をテーマに古代食・歴史等を学び、6年生では実際に校外で「観光ガイド」をします。これにより明日香村の子供達は歴史的伝承が出来るようになるのです。）

まず、明日香村が出している刊行物やパンフレット・ちらしを丹念に読みました。学生の頃から歴史や和歌に興味があったことも幸いしました。それに、私は図書館に配属され

ています。勤務時間が過ぎれば一人の利用者となって図書館を利用することとなりました。

図書館へ行って、いざ、読もうとすると難しい専門書です。いきなり専門書を読んだところで頭に入るはずもなく、まずは、歴史小説から読んでいくことにしました（例えば壬申の乱を扱った黒岩重吾さんの『天の川の太陽』）。小説になっているので、事実の真偽性は別として、親子等の系図・歴史の流れや当時の外国との関係がよく分かりました。それから、真実を追い求めていく専門書へと読み進めていきました。

気の多い私は途中で『古事記』へいたり『万葉集』へいたり。その作者について調べてみたり。だんだんと幅が広がっていきます。

明日香と切っても切り離せない『万葉集』の中で一番のお気に入りをご紹介します。

「銀（しろがね）も

金（くがね）も玉も 何せむに

まされる宝 子にしかめやも

山上憶良

（巻5-803）

（金銀も玉も、どうして子という優れた宝に及ぼうか、及びはしない。子こそこの世の最高の宝である）

この近畿大学に在籍している学生の全ての親御さんたちはきっとこのような気持ちでいらっしゃるのだろうか。子を持つ一人の親として強く感銘した一首です。

近畿大学中央図書館は「地方史・誌の充実」に力を入れています。皆さんも、もう一度自分たちの住む街の歴史を探ってみませんか。自分探しの第一歩になるかもしれませんよ。